

---

# 車には気をつける！！

琴原 鈴音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

車には気をつける！！

### 【コード】

N11100

### 【作者名】

琴原 鈴音

### 【あらすじ】

銀魂メンバーとリボンメンバーが薄桜鬼の世界へ飛ばされちゃったよ！！

できるだけギャグでいきたいと思います！！

現在凍結中

## 0話 人物紹介（前書き）

初投稿です！

これからガンバッテいきたいと思えます！！

## 0話 人物紹介

オリキャラ紹介

名前：杉宮 蓮すぎみや れん

年齢：13歳

性別：女性

能力：時空移動、治癒魔法

性格：・「明日は明日の風が吹く」がモットーの

大雑把な中学生

- ・ロリポップが大好きでどこから出てくるのか  
ミラクルってぐらい、服の中からでてくる

\*その他の人物紹介\*

銀魂メンバー

坂田 銀時：万事屋オーナー

志村 新八：万事屋アルバイト店員

神楽           ：夜兔族の少女

近藤 勲       ：真選組局長

土方十四郎：真選組副長

沖田 総悟：真選組1番組組長

リボンメンバー

沢田 綱吉：ボンゴレファミリー10代目ボス

獄寺 隼人：ダイナマイト少年

山本 武       ：野球好き

薄桜鬼メンバー

近藤 勇 : 新選組局長  
土方 歳三 : 新選組副長  
沖田 総司 : 新選組1番組組長  
永倉 新八 : 新選組2番組組長  
斉藤 一 : 新選組3番組組長  
藤堂 平助 : 新選組8番組組長  
原田左之助 : 新選組10番組組長  
雪村 千鶴 : 新選組にて人探し中

こう書いておきながら、でないキャラ  
いるかも・・・(悲)

## 1話 (前書き)

本編に入りますよ

銀魂からのスタートで、

オリキャラと登場人物は仲いい状態からのスタートです。

## 1話

「おい」「蓮ちゃん」

誰かが後ろから私に声をかけた。

「・・・あゝ万事屋さんたちだゝゝ・・・」

「おい、何だよその気の抜けた感じはよゝ」

「それは、銀ちゃんに言われたくナイネ」

「僕もそう思います。」

「いちいちうるせーガキどもだなー」

いいんだよ、俺はいざというとき、きらめくから！  
で、あんたが火曜日に見かけるなんてめずらしいな」

「そうネー！ 蓮ちゃんいつも月曜と木曜以外

診療所にすらいないアル！

いつもどこに行ってるアルか？」

「あゝ、ちょっとした副業みたいなもんやってるからさゝ」

「副業のほうか働く日多いじゃないですか！！」と新八

「まゝ気にしないでゝゝゝ」

あつそろそろ仕事始まる時間だから行かないと！！  
じゃ〜な〜」

タツタツタツタ・・・

「行つちやいましたね銀さん」

「あいつ、副業やってるつたつて

1週間の内2日しか開かない診療所って潰れるんじゃないかね？」

と一方、心配されている蓮は、

「やば！！まじで遅刻かも・・・・・・・・・・・・・・・・」

まあいつか〜

その時は、その時〜」

そんなことお構いなしにのんびり歩きはじめた・・・



## 1話（後書き）

ここまでみてくれてありがとうございます。

13歳で診療所経営って・・・

まあ、そこは華麗にスルーしてください・・・

多分次回他の世界いくと思います。

## 2話(前書き)

いつになったら薄桜鬼の世界へ  
行くんだろう・・・

## 2話

さて、自宅兼診療所に戻った蓮は、  
銀魂の世界に似合わない格好をしていた。 さっきまで着物

一言で表すなら「ブレザー」である

そして、なぜそのような格好をしているかと言つと、  
火曜日だからである！「後書きを読むと少し詳しくかいてある  
よ」

「いや、その説明じゃ分からないから作者」 蓮

あつぱり？

そうだよね〜分かんないよね〜 作者

つてわけで今から簡単に説明すると今から  
能力を使ってリボーンの世界に行きます！！

「いや、それでも分かんないし、簡単すぎじゃね？

まあいいけど・・・それじゃあ行つきます」

と、蓮の挙げた右手から突如まばゆい光がでて  
体をおおい、その光が消えたとき、

蓮は現代風の住宅街のたち並ぶ道路いた。

「うわ、もう完全に遅刻じゃん！！

雲雀さんごめんなさい！もうしないとですから〜」

そして、そんな事を言いながら蓮は並盛中学へと走っていった。

~~~~~

そのころ1時間目の終わった並盛中学校では・・・

「杉宮さん来ないね。」

学校休んでばかりだけど、火曜日と金曜日には必ず学校へ来るのに・・・」

「大丈夫ですよ！10代目！

来なかったらぶつ殺しますから！」

「いやいやいや！！、それはだめで・・・」  
「バーン！！！！！！」

ツナがセリフを言い終えないうちに、勢いよく教室の後ろのトビラが開いた。

「セーフ？」

「いや、アウトだ」

「そんなことはない！！」

ちゃんと2時間目には間に合ったし

それに、遅刻常習犯の獄寺に言われたくない！」

「なんだとー!!」

「まあまあ、けんかすんなって」

「あっ、山本おはよう」

「おはようさん!!」 さわやか

「それにしても今日は遅かったね」とツナ

「まあ、いろいろあったから・・・」

そんな話をしていると、

「おーい2時間目はじめるぞー席につけー」  
の声と、ともに先生の登場で授業は開始された。

そして、リボーンの世界での生活がはじまった。

## 2話（後書き）

ごめんなさい始めのほう分らないと思います（泣）

月、木曜日が銀魂の世界で、

火、金曜日がリボーンの世界で、

水、土曜日が薄桜鬼の世界に能力で飛んで

その曜日ごとに、それぞれの世界に住んでいます。

なので、蓮は銀魂の世界から、リボーンの世界へ行きました。

### 3話(前書き)

ぶっちゃけると、この先の話  
考えてないんですよわ  
どーしまじまじっ？

### 3話

キーンコーンカーンコーン……

「あーやっと、今日の授業終わったよ。」

「お疲れさまでした。10代目」

「なあなあ、今日野球部の練習ないから、これから3人で遊ぼうぜ?」

「いいね!どこ行くの?」

「ゲームセンターはこの前行ったばかりですし……」

「今日、俺の家に人を呼ぶなってリポーンに言われたし……」

と、どこで遊ぶか迷っている……

「いい所、教えてあげよっか?」

「あっ、杉宮さん。」

「いいところって?」

「ちょっと変わっているけど、おもしろいところだよ」

「変な所つれてくきじゃねーだろーな!」



「変つて言えば変だけど、まあ行けば分かるよー  
どつ?行つてみる?」

「どうせ行くところ、決まってるから、  
いいんじゃない?」

「まあ、山本もそう言ってるし・・・」

「10代目が行くなら、どこまでもお供します!!」  
獄寺もあまり異論はないようだ。

「それじゃあ、杉宮さん案内してもらってもいい?」

「はい、はい。」

「じゃあ、レッツゴー!」

（　　）（　　）（　　）（　　）（　　）

突如、蓮の右手から出た光にびっくりして  
身動きがとれないうちに4人の姿は、教室から  
消えていた・・・

### 3話（後書き）

ありがとうございました

やっと動き出してくれました

## 4話（前書き）

中間テストが無事終わりました。  
結果は、神がおりてきました！  
奇跡！！

## 4話

「……………じゅ……め、じゅ……だいめ！、  
10代目！！」

「……………！！」

「10代目！！」

「大丈夫か？ツナ」

「うん。大丈夫。ありがとう獄寺君、山本」

「よし、ツナ君も目覚めたし、そろそろ出発  
しますかね」

「……………あれ？俺どうして眠ってたんだっけ？  
ってゆうかここ、どこ！？」

ツナが驚いた声をあげた。  
まあ、驚くのも無理はない。

なぜなら、さっきまで教室にいたと思っていたら、  
まわりに白以外の色はなく、左右にいっぱい扉がついた  
長い通路で眠っていたのだ。

「正確には、気を失っていたっていう方が正しいけどね。  
そして、ここは空間の狭間だよ」

「空間の狭間？」

「そ〜そ〜、ちなみにツナ君はこの、時空の狭間に入るとき  
気を失ったみたいだね〜」

で、獄寺君と山本君には、話たんだけど、  
ここにいっぱいある扉からいるんなところに行けるの。  
それで、今からツナ君達は別の世界に行くんだよ〜」

( ( ( . . . . . ! ! ) ) )

「別の世界に行くって事は聞いてねーぞー!!」

「だから今、話したじゃん．．．．．、  
大丈夫だよ!! 魔界に連れ込むってわけじゃないんだから!!」

ツナが不安そうな顔をしたので、あわててフォローを  
いれた。

「どうしますか？10代目」

「今から行く世界は杉宮が知ってるみたいだし  
大丈夫じゃね？」

「野球バカは黙ってる!!  
俺は10代目に聞いてんだ!!」

「ご、獄寺君、落ち着いて!!」

「どうしたの？やっぱり行くのやめる？」

「えっと……、」

ぴりりりりり、ぴりりりりり……

「あつ、ちょっとゴメン。もしもし？

………つえ！！ 急患！？

……事故……分かったすぐに向かう！！

ピッ

ごめん。ツナ君たち。

もう悩んでる時間がない……急いで帰るか、

一緒に来るか決めて！！」

「………なんか、よく分かんないけど、

大変みたいだから、僕も行くよ！！

もしかしたら、手伝える事もあるかもしれないし……」

「だな」

「10代目がそう言うなら。」

（………！見知らぬ世界に行くことを

もう怖がっていない目だ。）

「ありがとう！！それじゃあ、行くよ」

そういうと、蓮は立っている位置から右側の数えて5番目扉を開けた。



#### 4話（後書き）

蓮ちゃん・・・

人をまきこんじゃダメだよ・・・

もし見てくれてる人がいたら、

感想とかくれるとうれしいです!!



## 5話

「今度は気を失わずに着いたみたいね。」

その言葉に、目をつぶりながら扉をくぐったツナは、まぶたをあげた。

そして、目をあけたツナが見たのは、社会の資料集などに載っている江戸時代風の家の中だった。なぜ、江戸時代風かというと、あるはずのない電化製品があるからだ。

「さて！！あと10分もないだろうし、急いで準備しなくちゃ！……つとその前にその服どうにかしなくちゃ……、たしか、隣の部屋に男物の服があったから、勝手にあさって着替えて。」

そうゆうと蓮は3人を隣の部屋へ押し込んだ。

「なんか……すごくテキトウだね。」

「あはは、この世界の服ってどんなんだろな？」

「まあ、とにかく着替えましょう10代目。」

「うん。そうだね。」

-----5分後-----

コン、コン

「杉宮さん、着替えたよ？」

「こつちも準備できたから入ってきていいよ」

ガラ・・・

「あゝ、結構似合うんじゃない？」

と、そういう蓮も淡い黄色い着物の上から白衣を羽織い、かんざしをつけて着替え終わっていた。

ちなみに、ツナは若草色 獄寺は黒 山本は紺色の着流しを着ている。

「ここの世界の服は着物なんだね。」

「そゝ まあ、洋服着ている人もいるけどね」

・・・などと話していると、

玄関の方から車が急停止した音が聞こえ、その後 ドンドンという戸を叩く音と共に「蓮先生、いますかー!?」と言う声が響いた。

「今行く!!! . . . .、それじゃあ行きましょ〜か」

カラカラ、カラカラ . . . . .

と、玄関を開けるとそこには同じ洋服を着た男2人が立っていた。

「いやー、先生が見つかってよかった!」

「なんかそれじゃあ、あたしが行方不明者みたいじゃないですか。」

「 . . . . あんたは携帯の電源切れてる事が多いから隊総出で探しても、見つからないときがあるんだよ。」

「あ〜ごめんなさい . . . . って急患なのにこんなんびりしてていい訳!?!?」

「あんたが着くまでには生きてるだろ。」

「そうゆう事じゃない!!  
急いでいかないと医者って感じしないじゃん!!  
分かってないな〜トシさんは。」

「なに、意味わかんねー事言っただよ。」

「まあまあ 2人とも、そろそろ行くよ」

「はい」

「………ところで後ろのやつは誰だ？  
背後霊か？」

「、その事は車の中で話すよ。  
だけど、今から一緒に現場へは行くから」

「……わかった。そんじゃあ、この車は5人乗りだから  
後ろに4人で乗れよ。」

「はい、はい、

それじゃあ事故現場へレッツ ゴー」

そしてようやく車は走り出した。

## 5話（後書き）

なんかエラーがおきて  
やりなおし、しました。  
（泣）

## 6話（前書き）

なんか、薄桜鬼のみなさんと会う  
のは、当分先かも・・・

## 6話

「……で、そいつら誰なんだ？」

車に乗って数分、乗る前から疑問  
だった事を聞いてきた。

「ああ、紹介しなきゃね」

このツンツン頭が、沢田綱吉さんで、この  
いかにも不良って感じの人が、獄寺隼人さん  
そんで、この黒髪の少年が、山本武さん。  
みんな、あたしのお手伝いしてくれる人だよ」

そう言つと蓮は話す相手を前の2人からツナたちにかえた。

「ツナ君達にも紹介するね」  
今、運転してる人がマヨラーの土方十四郎さん、  
助手席に座っているのは近藤勲さん。  
2人とも、真選組っていう、この世界の警察をやつてて  
局長と副局長なんだよ」

と、簡単にお互い紹介し終わった時  
車が止まった。

「先生着きましたよ」

「近藤さん、先生はやめてくださいって言ってるじゃないですか  
恥ずかし〜です。」

「おお、そうだったな！！すまない。  
・・・それじゃあ、蓮くんさっそくたのむよ」

「イエッサ」

蓮はグダグダな敬礼をして車からおりた。

「うわ、すごい・・・」 ツナ

その感想どおり、バスとトラックの正面衝突事故現場は  
なかなか見れない光景である。

「ま〜ここまで見事なのはそうそうないよね〜」

と事故の感想を言っていると、

「れーさん。」とツナ達の知らない男性が声をか  
けてきた。

「あつ、そーさん！

「そーさんが現場担当なの〜?」

「ええ、パトカーの目の前で事故になりやしたんで、  
こうして俺が担当になったんでさあ」

「そんじゃ、さっそく患者さん避難させた所へ  
現場担当さんに案内してもらいましょ〜。  
ツナ君たちもこっち着いてきて〜」



こうして、蓮たち御一行は患者の元へ向かった。

## 6話（後書き）

すごく、中途半端ですが、  
一回ここで切らせてもらいます。

## 7話（前書き）

にじファンの作品をはじめて読んだとき  
オリキャラってどうゆう意味かわからなかった・・・

\*グロって程じゃないけど、今回は治療話なので、  
苦手な人は注意して読んで下さい。\*

## 7話

せてせて、蓮たち御一行が案内された部屋には  
人数にして30人ほどの人がいた。

(のち、重傷者10名)

「そんなじゃ、さつさと殺ろ」

「れーさん、漢字変換ちがいまさあ」

「わかってる、わかってる」・・・

しかし蓮は、そんなやりとりをしながら、

次々と近くにいる人から、すばやく手当てしていった。

そして、何人が手当てし終えた後、ツナたちの方を向き、

「大体、あんな感じで手当てしてけばいいから」  
と言って重傷者が集まっている場所に向かった。

( ) ( ) ……いい加減すぎる！ ( ) ( ) つな、獄寺、山本

「、、、、 まあ 手当てしよっか」

「そうですね。」「おう」

こうしてツナたちも手当てにとりかかった。

ちなみに、総悟はいつの間にか部屋からいなくなっていた。

「ふう、やっと終わった。獄寺くんと山本はどう？」

「こっちも終わりました。」

「俺も!」

「じゃあ、重傷者以外はみんな手当てし終わったね」

「これから、どうしますか10代目？」

「うーん……、」

とにかく杉宮さんの所へ行く？」

「それしかないですね……。」

「杉宮さん、そっちはどう？」

「あつ、ツナ君達は終わったの？」

おつかれ、こっちもあと1人治療したら終わるから  
そこで待ってて」

そう言いつと、蓮は最後の1人の治療を開始した。

「……骨折はないみたいだけど、  
破片での切り傷がひどいね〜女の人だし、傷が  
残るとよくないから、「あれ」やるか〜」

（「あれ」って？）とツナが思っていると、  
蓮が傷口に左手をかざした。  
すると、そこから時空移動したときの様な  
光が出た。

「うわっ!!」

時空移動するかと思ったツナは、びっくりしたが  
なにも変化はなく、その代わりに女性の傷がみるみる  
塞がっていった。

（）（）（）（）（）（）（）（）

「よし!!治療完了〜」

「おい!!今のはなんだ!!？」と獄寺が代表して  
質問した。

「これ〜？治療魔法みたいなもんだから  
気にしないでいいよ〜」

（いや……めっちゃ気になるんですけど……）  
と心のなかで思っていたとき、さっきの男の人が戻ってきた。

「お疲れ様でした。これ、今日の分の治療費でさあ」

「ありがとう、」

「あの・・・杉宮さんこの人は？」

「ああ、この人は沖田総悟さん。真選組の1番組組長だよ、  
そーさんはツナ君達の事知ってるよね？」

「ええ、知ってまさあ」

「え・・・なんで？」

「それは、後で分かりますあ・・・  
どうせこの後旦那の所へいくんでしょっ？」

「よく分かったね」

「ここから近いですから」

「それじゃあ、お先に失礼するわ〜  
近藤さんとトシさんによろしく〜」

そう言つと、蓮は部屋から出てさつさと歩きはじめ、  
ツナ達も総悟にお辞儀をすると急いで蓮の後を追った。

## 7話（後書き）

はい、追加設定できました。

右手から出す光が時空移動

左手から出す光が治癒魔法に決定しました。



## 8話（前書き）

だんだん、読んでくれる人が増えてきました。  
これからもよろしくお願いします！

## 8話

「待って！杉宮さん！！」

その言葉で後ろを振り返った蓮は、ツナ達が追いつくの待ってから、並んで歩き出した。

「なあ、今からどこ行くんだ？」と山本が質問すると

「「万事屋 銀ちゃん」ってお店」と蓮が答えた。

「万事屋？」今度はツナからの質問

「なんでも屋って意味だよ」

あつ、見えてきた！あそこだよ」

そこは二階建ての建物で、1階がスナックで、二階が万事屋 銀ちゃんという看板がかかった。

.....

「こんにちは」と二階の玄関の前に立ち蓮が声をかけると、奥から足音が聞こえ、戸が開いた。

「どうも、メガネ君。朝ぶりだね」

「蓮さん！どうぞ上がってください。  
銀さん、神楽ちゃん！蓮さんが来ましたよ。」

そう奥に「メガネ君」と呼ばれた人が言うと、  
チャイナドレスを着た女の子が走ってきた。

「蓮ちゃん！！どうしたアルか？  
とにかく上がるネ！！」

「ありがとうございます。神楽ちゃん  
お邪魔します」

と言いながら半分引きずられるように奥に  
入っていきそうになった蓮は、ツナ達にも入るように言い、  
今度こそ、ずるずると先に奥へひっぱられていった。

「、えつと……どうぞ？」

「あ……お邪魔します」

そして、残りの4人も万事屋の中へ入っていった。

-----  
その頃、事故現場では……

「土方さん、れーさんに治療費渡してきました。」

「おう、ご苦労だったな。」

ところで、こっちに向いてるバズーカはなんだ？」

「土方さん、それは目の錯覚でさあ」

「錯覚なわけねーだろー！」

「どんだけ俺のこと嫌いなんだよー！」

などと、いつもど通りの喧嘩？をしていると

近藤さんもが「いい話がある」と言っていてやってきた。

「いい話ってなんですかい？」

「うむ、実は少し前、蓮くんが治療している所に

行ってきたんだが、そのとき、明日、暇なら旅行へ行こう  
って話になってな、行き先は蓮くんが決めてくれるそうだ。」

「旅行って言っても幹部3人が同時に休むのはよくないんじゃないか？」  
と土方が、正論を言うと、

「なんだ、トシそんな事気にしてたら男じゃないだろ。」

「そうだぞ土方 おまえなら休めるはずだ土方」

「……………わかったよ。行きゃーいいんだろー！  
(ヤケクソ)」

「それじゃあ、俺かられーさんに伝えておきますね。」

「頼んだぞ。総悟」

そう言いつと、それぞれ別の部屋へ向かった。

まるで、一つの舞台が終わったみたいに……

## 8話（後書き）

はめられましたね。土方さん

けど、これで「旅行」に真選組参加決定です。

## 9話(前書き)

がんばって毎日書いてたのに、  
昨日はお休みしてしまいました・・・  
くそー！！

こんな何話にも分けてるけど、まだ1日も過ぎてない  
・・・

## 9話

蓮が先にリビングへ行くと

いつものように、銀髪のとんぱーがソファーに横になりながら、「ジャンプ」を読んでいた。

「こんにちは、というよりもうこんばんは、だねー  
銀さん」

「おー蓮が来るなんて久しぶりだな。  
うちに食うもんなんてねーぞ。」

そう言いながら銀時は、ジャンプをテーブルに置いて  
起き上がった。

「ちがうよー、今日は紹介したい人たちと、  
ちよつとした話があるから寄らせてもらったんだ」

と、ちようど蓮が言ったとき、残りの4人も  
リビングへ入ってきた。

「あつ来た来た。．．．銀さん、この子達見覚えない？」

「はー？なんで、俺が初対面の相手知ってんだよ。  
．．．．．！！」

しかし、ツナ達の顔を見たたん驚愕にみちた顔をした。  
そして．．．



「ツナじゃねーか!!」と思いつきり言った

「えっ、どうして俺の名前を・・・?」

ツナが質問すると、蓮が変わりに答えた。

「それはね、この「ジャンプ」をみれば分かるよ」

そう言っつて、テーブルの上に置いてあつたジャンプを渡した。

ジャンプなら、自分たちの世界にもある有名週刊誌だ。

そして、その連載作品の中に「家庭教師ヒットマンリポーン!」  
という題名でツナ達のが載つていた。

「お、俺たちの事が載つてる!!」

「しかもこの話、最近あつた出来事だな」

「これで、なんでツナ君たちのことを知つてか理解できた?」

「う、うん。だから沖田さんも、俺たちの事知つてたんだね。」

「ちなみに、この世界の話は、ツナ君たちの世界のジャンプに  
載つてるから、帰ったら見てみるといいよ」

と、話すと今度は万事屋ファミリーから、質問があつた。

「蓮さん、なんでジャンプの主人公がこんなところに、  
いるんですか?」

「あ、それはね、あたしって不思議な力使えるじゃん?」

「傷、治したりアルか？」

「そ〜そ〜 で、その能力の中に時空移動つてのがあるんだけど、それを使って、こつちの世界へ来たの。」

「そんな能力もあつたんですね。知りませんでした。」

「ま〜ね〜、で、本題はここからなんだけど、

この力使つて、明日「旅行」行かない？」

「へー旅行かどこへ行くんだ？」 銀時

「他の世界なんだけど、海の近くのリゾート。」

「誘つてくれるのは、うれしいがあいにく経営難でね。余分な金はだせねーんだ。」

「あつ、そこは大丈夫〜。そのリゾート、友達が経営してるから無料〜」

「それなら、行くか！」

「やつほーい！蓮ちゃんと旅行行けるネ」

「僕も楽しみです！」

「そんじゃ、明日の午前10時にあたしの家に来てね〜」

そう言うのと、蓮たちは家へ帰っていった。

――  
――  
帰り道……

「杉宮さん、旅行行くななんて聞いてないよ！」

「ごめん、ごめん。言うタイミングがなくてさ、  
けど、行きたいでしょ？旅行」

「ま、まあ……」

「獄寺君と山本君もいいでしょ？」

「ああ」

「10代目がそう、おっしゃるなら。」

「さあ、明日は楽しい日になるよ〜」

こうして、4人は家へ帰っていった。

## 9 話（後書き）

銀魂メンバーとリボンメンバーが  
いるのに楽しい普通の旅行になるわけないよね〜

## 10話（前書き）

今日パソコンを見たら、  
感想を書いていてくれる人がいました！  
名前を出していいのかわからなかつたので、  
名前は公表しませんが、ありがとうございます！！  
とっってもうれしかったです！

## 10話

スパーン！と、いきよいよく開いた扉から蓮は声をかけた。

「さー、朝だよ！！そろそろ、起きたほづがいいよ」

そう言っつて次々と川の字で寝ていたツナ達を起こしていった。

「うーん……おはよう杉宮さん」

「おはようさん！」

「おはよう。ツナ君、山本君、よく眠れた？」

「きのうは、いろいろあったから、さすがにね……」

「俺はどこでも眠れるぜ！！」

「タフだなー山本君は、獄寺君も眠れたみたいだし、まあ、3人ともよく眠れたみたいでよかったよ？……それじゃあ、向こうに朝食用意してあるから食べよ」

と言う事で、4人は隣の部屋へ向かった。

「「「ごちそうさまでした。「「「」

「さくじゃあ、3人は向こうの部屋で準備してきな  
昨日、疲れてて準備してないでしょ？」  
わたしも、こっこの部屋で準備するから」

「えっと、服とかカバンは・・・？」とツナが質問すると  
やはり・・・

「押入れとか探せば出てくるんじゃないかな？」  
という、いい加減な答えしか返ってこなかった。

----- 30分後 -----

いままで、静かだった玄関が一気ににぎやかになった。

「あつ、来たみたいだね」  
「・・・ツナ君たちはしたくできた？」

「うん、大丈夫だよ」とツナが答えると

「それじゃあ、出かけよう」と元気よく

蓮が出発の合図を出した。

カラカラ、カラカラ……

蓮が玄関の戸を開けると、開けた瞬間  
神楽が蓮に抱きつきながら叫んだ。

「蓮ちゃん！…どうして、サドやマヨラーや  
ストーカーも一緒ネ！！」

「あゝ、もめると思って黙ってたんだよね」

「つまり、真選組の皆さんも一緒なんですか？」

「そゝそゝ　メガネ君正解」

「ふざけんな！！なんで俺らが真選組となんて旅行しなくちゃ  
いけねーんだよ！！」

「俺だって、万事屋なんかと旅行旅行したくねーよ！！」

「まゝまゝ、銀さんもトシさんも落ち着いて、  
別に行くのをやめてもいいですけど、おいしい食べ物や、  
きれいな海で遊べなくなりますよ」

そう、蓮が言つと異論はなくなった。

「じゃあ、反対意見もなくなったし、行きましょ」



と、言いながら蓮の挙げた右手が真上に来たとき  
手から出た光が、10人を包んで消えた。

## 10話(後書き)

あーやっと、時空移動してくれました。  
長かった・・・

## 11話(前書き)

ちよつと、用事があつて  
お休みしてました

## 11話

パツ・・・・・・・・

まわりの光が消えた銀魂メンバーは  
あたりを見まわした。

「なんか、洞爺湖と会った所と似てるな。」

「けど、こんな扉もなかったし、長い道でもなかったですよ。」

「うおー！！すごいアル 蓮ちゃん魔法使いネ！」

「ありがとう」

そう言うプラス？な感想とは逆に、マイナスの感想を  
言う人が1人いた。

「ったく、なんで万事屋なんかと・・・」

「まー、まートシ、せつかくの旅行なんだ、  
楽しまなきゃ損だぞー！」

「そうだよートシさん、あきらめなよー」

「連れてた本人が言うんじゃないよー！」

「おーい、蓮そんな奴ほっとけ、

近くにいると、ニコチンになるぞー」 銀時

「なんだよ！ニコチンになるって」

「大串君の必殺技に決まってるだろ。」

「なに、そんな設定作ってたんだ！ってゆーか大串君じゃねーって言うてるだろ！」

「あら、大串君カルシウムが足りなくてよ。そんなんじゃ、いつまでたっても、ニコニコ顔になれなくてよ。」

と銀時がふざけて女言葉でしゃべると、とうとう、土方が切れた。

「おらー！！万事屋、刀抜け！

ここで、前の決着つけてやる！！」

「ほら、やっぱりカルシウム足りてねーじゃねーか。だめだねー最近の若者は。」

「うるせー！行くぞー！」

「あっここで喧嘩は……」

と、蓮が言った時にはもう、斬りかかった土方の真剣を銀時の木刀で支えていた。

そして運の悪いことに、交わった刀から

火花が生まれた。

バチツ・・・!

ボウオオオオ!!.....!!

「何これ!?!」  
今までみんなの様子を見ていたツナが、声をあげた。

それもそのはず、なぜなら火花が瞬またたく間に  
大きな炎となって、広がったのだ。

「れーさん、これは、どういうことですかい?」

総悟はこの空間の事を一番よく知っているであろう  
蓮に質問した。

「えつと.....、  
ここの空間って酸素が普通の世界より、とっても多いから  
ちっちゃな火花でも、こんな風に炎になったんだよね。」

「おいおいおい!どーすんだよ!  
銀さん達、焼き死んじまうじゃねーか!」

「いやアル!!こんな所で死にたくないアルヨ!!  
せめて、酢コンブ10箱、同時に食べてからがいーネ!」

「案外、簡単と死ねるんだな。」

と、こんなときでも、突っ込みを入れる新八

(うーん、このままだと、みんな死んじやうし、

銀魂の世界の扉はもう燃えてる、リボーンの世界の扉は、

炎の向こう、バカンスの扉なんてリボーンの世界の扉のもっと向  
こう

かといってまだ、あたしが調べてない扉は、

どうなってるか分からないし………!!)

「? 杉宮どうしたんだ?」

いままで、うつむいて何かを考えていた蓮が顔を  
上げたので聞いてみた。

「いい場所があったんだよ! 山本君!」

みんなも蓮の言葉を聞いてこちらを向いた。

「どこなの? 杉宮さん?」

ツナが聞いていた。

炎はもうそこまで迫っている。

「えつとね、この扉の世界」

そう言っつて獄寺の寄りかかった扉を指差した。

「みんな知らないと思う世界だけど、

あたしは知ってるから、たぶん大丈夫!







## 11話(後書き)

ありがとうございました。

そろそろ、新しい小説を書こうと  
思ってますけど、どんなのがいいでしょうかね？

## 12話（前書き）

こんにちは

さてさて、いきなり宣伝なんですが、新しく小説を書き始めました。

題名は「月の姫巫女さまと陽の姫巫女さま」です！

・小説を読もう・の方にあります。

よろしければ、読んでくれるとうれしいです。

## 12話

扉を開けたその先は、銀魂の世界とよく似ていた。空に何も飛んでないのを除いて。

「おい杉宮！ここはどんな世界だ！」 獄寺

「ここは〜簡単に言うと昔の京都市的な・・・」

「蓮ちゃん、お腹すいたネ」

「あ〜ごめんね神楽ちゃん。」

少しの間この飴で我慢してて」

そう言うと神楽の手いっぱいには飴を置いて、話を再開した。

「れーさんはこの世界にもツテはあるんですかい」

「うん。あるよ」

ここから、もうちょっと行った所にね〜

・・・「時空の狭間」は

炎が消えないと使えないから、そこにお世話になる〜」

「だけど、こんな大人数お邪魔しちゃって大丈夫なんですか？」

「大丈夫だよ〜メガネ君、・・・」

それじゃあ、ここにいっても始まらないし、行こっか」

そうして、10人は移動を開始した。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

「さあ、着いた!!」

蓮たちは10分ほど歩いたある場所で、止まった

「・・・新選組?」とかかっていた看板をツナが読み上げた。

「しかし、俺らの漢字と違うな」

土方はタバコをくわえなが言った。

「漢字は違っててもやってる事はほとんど、一緒だから。  
・・・あつその人、局長呼んでもらえる?」

蓮は門をくぐって入って行きそうになった人を呼び止めた。  
すると・・・

「蓮先生! すみません、今局長がいないので、副長になります  
が・・・」  
と遠慮がちに言った。

「うっ・・・副長か・・・」。

まあ、呼ばないと入れないし・・・呼んでもらえる?」

「分かりました。」

そう言つとその人は、奥へ入つて行つた。

「蓮ちゃん、この世界でもお医者さんやってるアルか」  
神楽が飴を舂めながら聞いてきた。

「そ〜だよ・・・あまり仕事してないけど・・・」  
と、言つと

「ここでもか！」と新八につっこみを入れられてしまった。

\*\*\*\*\*3分後\*\*\*\*\*

「蓮ちゃん、まだアルか？」

「う〜ん、あの人も忙しい人だからね〜  
あつ来たよ〜」

そう言つて蓮が指差した先にはすぐ、もてるであろう人物が  
こちらに向かつてきた。

「いったいなんの用だ。」

開口一番余分な事はしゃべらず、必要な事だけ聞いてきた。

「あいさつもないなんて、ひどいわ〜」

「うるせーこつちだつて忙しいんだ。」

用件を早く言え。」

「はいはい。じゃあ単刀直入に言うけど、あたしたちをしばらく、ここへ泊めてくれないか？」

「はあ~~~~?！」 土方

12話(後書き)

すみません、途中すぎるけどジュジュ、  
いったんきります。

ごめんなさい(泣)



13話(前書き)

ネタが思い浮かばなかった・・・

## 13話

蓮たちは門のところでは話すには、人数が多すぎて邪魔だと言うことで、大広間に移動した。

「さあ、どういう事が説明してもらおうじゃねーか」

「えーと・・・実は、私ついさっきまで遠くに出かけてたの  
それで、その行き先でお世話になったのが、この人たち  
なんだけど、この人は仮住まいを探していたらしくて、じゃあ  
お礼に住む所を貸しあげようってことで・・・」

「ダメに決まってるだろ!!」

「けど、この人すごく強くて、役に立つから、  
期間限定隊員だとすれば!」

「そんな事できるわけねーだろ!」

蓮はその他にも住むところがなくて可哀想など、いろいろ  
言ってみたが副長は頑として承諾しない。

「なんか、トッシーと似ているネ」

あきてきた神楽は、ツナに話し相手になってもらうことにした。

「十四郎さんと?」

「そうネ!!」

あの融通のきかない所なんてそっくりアル!!」

「そんなことないですよ？」

今は、近藤さんや隊長のみなさんがいないから勝手に決められないだけだと

思いますよ?」

突如、後ろからかわいらしい声が聞こえたので、後ろを振り向くと1人の少年がお盆にお茶をのせて立っていた。

「誰アルか?」

「はじめまして、雪村千鶴といます。

隊士ではないんですが、ここでお手伝いをさせてもらっています。

」

千鶴は、お茶を配りながら自己紹介を済ますと歳三の方に声をかけた。

「土方さん、近藤さんが帰ってきましたが……」

「わかった、悪いがここへ来るよう呼んでもらえるか？」

それと、今暇な隊長も呼んでくれ」

「わかり「千鶴さん!!」」

蓮は土方との話が終わったところを見計らって、千鶴に抱きついた。

「わっ・・・ね、蓮さん！」

「ねえねえ、あたしもみんなにあいさつしたいし、  
一緒についてっていい？」

「いいですけど・・・」

そう言いながらも千鶴の視線は客と土方のほうを向いている。

「大丈夫！すぐ戻るし、危ない人たちじゃないよ。  
行こう！」

そう言うと蓮は千鶴をひばって大広間を出て行ってしまった。

### 13話(後書き)

すみません。

親にいつまでやってる！って怒られたので  
切らせていただきます。

## 14話

「お待たせ」

蓮は笑顔いっぱい顔で戻ってきた。

「土方さん、みんなさん連れて来ました。」

「ごくろうだったな千鶴、

……ちよつと待て」

部屋を出て行こうとした千鶴は歳三に呼び止められて止まった。

「おまえは、一般隊士に決定事項を伝える為にここに残れ」

「分かりました」

「それで近藤さん、もう蓮から話は聞いてるんだろ？  
どうするんだ？」

「うむ。蓮先生はこの人達に助けられたと言うし、  
少しの間だけなら、隊士として入れることもできるんじゃない  
か？」

「……どうだ、みんなは」

今まで成り行きを見守ってた隊長たちに近藤は意見を投げかけた。

「僕は、近藤さんがいいならそれでいいですよ」b y 総司

「俺も局長がそう言うなら」b y 斉藤

「だが、一般隊士と混ぜるのはどうかと思うぜ」b y 原田

「どの隊に入れるのかも問題だな」b y 永倉

「ってゆーか戦うことできるの？」b y 平助

「それなら一度手合わせして、戦闘能力の見極めと、どの隊に入れるか決めればいいんじゃない？」

それに、一般隊士と混ぜるのが無理なら幕府から送られていた隊士で、様子見の間、隊長たちの八木郎だっけ？のほうで暮らせばいいんじゃない？」

蓮はそれぞれ出た意見をまとめ、提案した。

「でもよーもしこいつらがなにか問題起こした時、誰が責任とるんだ？」

「その時は私が責任をとるから安心して平助君  
あとは、近藤さんの決定次第だけだね。」

「わかった。蓮先生がそこまで言うなら大丈夫だろう。  
今から、どこの隊に入れるか調べて、住むところは  
この大広間にする。」

「やった！！近藤さん大好き！！」

「それじゃあ、さっそく剣術を見させてもらうぞ。

トシ、総司、一君や永倉君たちも手伝ってくれるかい？」

「どんな奴らが楽しみだな新ぱつつあん」

「おうよ平助負けんじゃねーぞ」

近藤さんの頼みなんか聞こえてない様子だが、

手合わせする気満々で、2人はもう道場へ向かってしまった。

「そんじゃ、あたし達も道場に向かおうか？」

「おいおい、これじゃあ修行とか仕事パターンじゃねーか

銀さんそーゆう主人公じゃないからね」

「なに言ってるネ！銀ちゃんトツシーのせいでこんな風に

なったアル！しっかりと働くのが道理つてもんネ！」

「うっ・・・分かったよ！やりやーいんだろ！」

こうなったら修行でも、仕事でもなんでもやっつてやるよ！！！」

「あつちなみにこの世界、銀さんやツナ君達の世界より

日常から物騒で危険だから死なないようにね」(笑)「

「(笑)ってなんですか！」

「いや、この中だとメガネ君がはじめに死ぬかな」

と思っ……」





14話(後書き)

なんか戦闘モード突入っぽい？

## 15話(前書き)

最近、もう一方の小説のほうをがんばっていて、  
こっちをお休みしました・・・

## 15話

「それでは、第1回新選組と居候組どっちが強い？  
選手権〜〜〜!」

「「「「「いえ〜い!」「」「」「」

パフパフパフ・・・ドンドンドン・・・

銀魂チームはどこから出したのか、ラツパと太鼓を鳴らしている。

「それでは、司会進行+審判+参加者の杉宮蓮です。

ルールは簡単、1対1の木刀勝負!

先にまいったと言うか片方が戦闘不能になった場合、試合終了。  
時間の都合上1試合10分で勝負がつかなかった場合は引き分けです。

対戦相手は、こちらで決めさせてもらいました!

「蓮ちゃん、銃は使っているアルか?」

「銃は使っているけど、この世界にないものは使っちゃいけないから、

ボンゴレリングやボックスは使用禁止ですから」

「ボムはどうなるんだ?」

「チビボムまでなら可。」

「ってゆうか何で杉宮さんはボンゴレの事知ってるんですか!？」

「銀さん達の世界でジャンプ見てるから。」

「そういえば、そうだったね・・・」

「さて、他に質問はありませんか？」

「・・・それでは、試合を始めたいと思います。」

第1試合 近藤勇対近藤勲

「近藤さん対近藤さんって絶対決めるのめんどくさかったんですね・・・」

「そうだね・・・」

ツナと獄寺が話している間にも一進一退の攻防が繰り広げられているが・・・。

「やあ!」

勇一（新選組）が振り下ろした、刀を勲一（真選組）の方が受け止めるが、なぜか足元にあった

バナナの皮で転び転倒。微妙な勝負のつきかたである。

「おい、チャイナ娘!なにバナナの皮、投げてやがる!」

「なにアルかトツシー、私がバナナ食べた証拠ないネ」

「おまえだけなんだよ。口が動いてんのは!」

「ここでゴリラが勝ったら、ゴリラとして失格ネ」

「はあ〜？なにわけ分か・・・」

「まあ、まあ 次の試合いくよ」

第2試合 斉藤さん対神楽ちゃん！

「斉藤、女の子だから手加減してやれよ」

野次をとばすのは、永倉だ

「神楽〜てきとうにがんばってこ〜い」

「なに言ってるアルか銀ちゃん！わたしはいつでも真剣勝負しかないね！」

「それでは、第2試合はじめ！〜！」

## 15話(後書き)

ごめんなさい超テキストな  
感じで進んじやってるし、この終わりがた  
ほんとすみません・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1110o/>

---

車には気をつける！！

2011年10月8日01時04分発行